

いもう 葦毛通信



ウメバチソウ

2021年1月25日
豊橋市文化財センター
豊橋市松葉町3丁目1
TEL: 0532-56-6060

No. 105

1、日本自然保護大賞2021選考委員特別賞を受賞しました。

愛知県指定天然記念物「葦毛湿原」と豊橋市指定天然記念物「ナガバノイシモチソウ自生地」で行っている「**大規模植生回復作業**」は、これまでに平成29年度（葦毛通信 No. 64 参照）・令和元年度（葦毛通信 No. 93 参照）の2回、日本自然保護大賞に入選しましたが、今回は**日本自然保護大賞 2021 の選考委員特別賞**を受賞しました。

日本自然保護大賞 2021 では、大賞3部門各1件、沼田眞賞1件、選考委員特別賞2件の合計6件が受賞し、その他に20件が入選しました。

葦毛湿原大規模植生回復作業が受賞するにあたって、以下の活動テーマや内容が評価され、国立研究開発法人森林研究・整備機構理事長の中静透氏による講評が掲載されました。

【活動テーマ】

土壌シードバンクの埋土種子を活用し森林化した湿地を再生・保護する。

【活動内容】

豊橋市・葦毛（いもう）湿原（愛知県指定天然記念物）で2013年から、地表面近くに多く含まれる埋土種子を効率的に発芽させる方法で、乾燥が進み森林化した湿地の再生に取り組み、県絶滅危惧種など14種の植物を復活させた。

【講評】

濃尾平野周辺の丘陵部を中心に分布する湧水湿地は、温暖な気候にもかかわらず貧栄養で低温の湧水によって維持されており、氷期からの遺存種を含むこの地域に特有の植物を数多く見られる貴重な生態系ですが、次第に森林化しています。この活動では、森林土壌の下にある過去の湿原土壌を検出し、そこに残る土壌シードバンクを利用して元の湿原を復元することに成功しました。このように、科学的根拠に基づき、森林化した植生を湿原に戻すという大胆な保全策を、行政、研究者、ボランティア団体など多くの関係者の協働により成功させたことを高く評価しました。（中静 透）

【受賞記念シンポジウム】

日本自然保護大賞 2021 の受賞を記念して、2021年3月13日（土）にシンポジウムがオ



ンラインで開催されます。ZOOM 画面のライブ配信、無料公開、申込不要となっています。
＜プログラム（予定）＞

- 14:00 開会挨拶、総評
- 14:10 受賞者による活動発表（大賞 3 件）
- 15:30 休憩
- 15:35 受賞者による活動発表（特別賞 3 件）
- 16:50 閉会挨拶

＊詳細は以下の日本自然保護協会のウェブサイトで確認してください。

日本自然保護協会プレスリリース URL: <https://www.nacsj.or.jp/media/2021/01/23876/>

2. 2020 年度作業報告ー2

今年の植生回復作業は第 3 段階に入りました。湿地中心部の遷移を部分的に後退させる段階です。今年を中心部の作業はいきなり大規模に行うのではなく、ネザサやコシダ等の湿地内部に侵出している植物の勢いを弱めながら、ミズゴケやヌマガヤを部分的に除去するやや大きめの実験区を設置していくつもりです。

現在は全体的な外来種の駆除と P・H 地点や一の沢湿地（S・T 地点）の周辺部で、ネザサの根を除去する作業を集中的に行っています。また、Q・R 地点（旧水田）では、昨年度の作業で木の伐採を行いました但抜根作業を行っていませんだったので、今年度は 2 月 1～3 日にバックホーによる抜根作業を行う予定です。

1）Q・R 地点（旧水田）

Q・R 地点で昨年行った作業は木の伐採と除草のみでした。下写真は R 地点を西から撮影した写真です。かつては大きな水田で昭和 10 年代頃までは馬で耕作していましたが、現在は乾燥化し、森林になっていました。画面中央手前から左側に石垣が残っていますが、所々壊れています。下左写真が木の伐採後 1 年目で切り株からヒコバエが伸び、乾燥地の植物が繁茂しています。

下右写真は抜根作業行うためにヒコバエと草の除去を行った状態です。除草の後、地表面にある未分解の葉や小枝等をできる限り除去しています。除去せずに抜根作業を行うと葉や枝等の栄養分になるものを埋め込み、土壌が富栄養化してしまうので、富栄養化防止のために手間がかかりますが、手作業でできる限り行っています。この作業の基本的な考え方としては、「**燃やせるものはすべて持ち出す**」ということです。また、持ち出したものには腐葉土になりかけているものもあり、家庭菜園の肥料としても利用しています。



R 地点伐採作業後 1 年目（2020 年 9 月 30 日） R 地点抜根作業前（2021 年 1 月 20 日）

右写真はR地点の北西隅から東の上流部を見たところです。右上写真は伐採作業後、植物が繁茂し水田の段が見えなくなっている状態です。手前の切り株の根元からは昨年の伐採作業後に帰化植物のゲンゲ（レンゲソウ）が発芽し、6月に花を咲かせました。水田で耕作を行っていた時に蒔いていたレンゲの種子が埋土種子となり、少なくとも50年以上たってから発芽・開花したと考えられます。

右下写真は除草した状態ですが、手前から画面奥に向かって石垣が3段になっているのが見えます。植物が繁茂すると段も見えなくなっていますが、ほとんどが乾燥化してネザサが勢力を増し、アカメガシワやカラスザンショウ等が発芽し、ダンロボロギクやメリケ



R地点伐採作業後1年目（2020年9月30日）



R地点抜根作業前（2021年1月20日）



R地点伐採作業後1年目（2020年9月30日） R地点抜根作業前（2021年1月20日）

ンカルカヤ等の外来種が目立つ状態になっています。

上左写真はR地点北西隅に昨年伐った木を仮置きしている状態で、右側は木を裁断し運

び出した状態です。ここも水田の跡ですが、手前にベンチが見えるように現在は休憩スペースとして利用しているところです。この部分はとりあえず水田には戻さず、現状維持をする予定です。昨年伐った木はかなり多く、細かく裁断するだけで一か月以上かかりました。同じ場所で木を伐っていたのでオガクズが大量に発生しましたが、これもすべて持ち出しています。

右上・中写真はQ地点の東側から西側（R地点方向）を見たところです。作業前は明るくなることによりネザサが優勢になって自生範囲を広げています。バックホーによる抜根作業でネザサの根も除去する予定です。

下写真はR地点の旧水田を南側の自然歩道側から見たところです。右側から奥に向かってQ地点の旧水田の石垣が見えます。ここでも、ネザサが優勢になっていました。かつては右手奥に水路がありこの水田に水が供給されていたそうですが、現在は水路が埋まり旧水田は乾燥化しています。抜根作業が終われば、石垣を修理し、埋まった水路を復元して旧水田に水を引き入れる予定です。成功すれば、湿地（放棄水田が湿地になっていた頃の状態）として再生すると予想しています。



Q地点伐採作業後1年目（2020年9月30日）



Q地点抜根作業前（2021年1月20日）



R地点抜根作業前（2021年1月20日）